

## 2. 各校の発表内容及び質疑応答

### (1) 青森県立大間高等学校

「わいどの青森～本州最北端の高校生  
が変えていく青森の未来～」



令和2年度高校生模擬議会

青森県立大間高等学校

令和3年2月3日(水)

1

# わいどの青森

～本州最北端の高校生が  
変えていく青森の未来～

青森県立大間高等学校 第一学年一同


2

### 青森県の抱える課題・現状

人口減少、塩分摂取量、短命県、生活習慣病、人口の社会流出、アピール不足、自殺者増加、肥満度、飲酒・喫煙、運動不足…

### 北通り地域の抱える課題・現状

人口減少、塩分摂取量、生活習慣病、人口の社会流出、アピール不足、肥満度、飲酒・喫煙、運動不足、後継者不足…



私たち高校生にできることはなんだろう？



3

青森県の課題 = 地域の課題  
 青森県の発展 = 地域の発展  
 地域のために力を発揮できる人 → 若者  
 若者の願い → 学校生活の活性化  
 高校生活の活性化 × 地域の活性化  
 = 青森県の発展！

4

提案テーマ  
**「学校生活を変える。  
 地域を変える。」**

提案例

- ・ 昼食をおいしく、たのしく  
 → 給食、健康カレンダー（レシピ）
- ・ 学校行事と健康の融合 → 遠足に健康を
- ・ 放課後は担い手不足の解消の時間 → 体験部
- ・ 高校生が地域をPR  
 → 作戦名「マグロード」、ふるさと納税を大間高校に！

私たちは、人口、健康、観光、農林水産業の4観点から青森県の抱える現状を調べてみました。

人口減少、塩分摂取量の多さ、観光地としてのアピール不足などが挙げられました。

大間町についても同じような課題が挙げられました。（2）

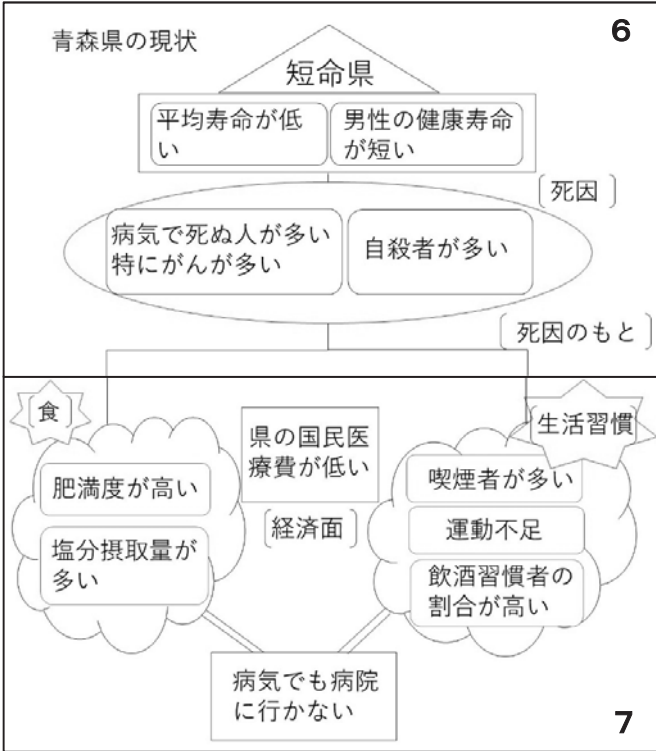
そして、解決策を考えていくうちに4つの観点や課題には共通点があることも分かってきました。

次代の担い手は若者です。

地域の活性化と高校生活の活性化で青森県を発展させていきたいと考えました。（3）

そこで、私たちは「学校生活を変える。地域を変える。」ことをテーマに、地域活性化のモデルプランを考えてみました。大間高校を例に、次のことを提案します。（4）

- 学校生活改善のための5つの提案 **5**
- ①青森県の高校に献立を考えてもらう。
  - ②耐久遠足を通して楽しく運動してもらう。
  - ③健康カレンダーの作成。
  - ④給食導入。
  - ⑤体験部。



健康に関する青森県の現状です。

特に塩分摂取量の多さが挙げられます。(6. 7)

**8**

# 1. 献立作成

このことを踏まえて、私たちは青森県の高校から1つずつ献立を考えてもらうことを提案します。(9)

- 9**
- 提案  
「県内高校生によるレシピコンテスト」
- 方法  
「青森県内の高校から1つずつ献立を考えてもらう」



- 10**
- ①青森県内の高校から献立を1つずつ提案
  - ②大間高校生もしくは県の機関が回収し、一覧にする。  
それを県の教育機関から各高校に送る。
  - ③一覧をもとに、各学校の調理実習や家庭科部の時間を活用して、班分の献立を選び作ってもらう。



- 11**
- ④見た目・味・栄養バランス  
調理実習した生徒自身で五段階評価をしたレポートを作成し、その学校でどの献立が一番良かったか決める。
  - ⑤その学校の結果を県の教育機関に送信して、とりまとめてもらう。  
一番献立がよかった学校を決める。

- 12**
- ⑥結果の発信方法
    - ・県のホームページ
    - ・新聞社
    - ・地域おこし協力隊 など

まず、①青森県の高校からテーマに沿った献立を1つずつ提案してもらいます。

例えば、塩分を抑えた献立や糖分を控えた献立、地元の名産品などのテーマを提示します。

②一度回収し、県の教育機関に一覧にして各校に送ってもらいます。

そのときに、例えば、塩分なら塩分量、地元の名産品ならどのくらい使われているかを数値化してもらいます。

③その一覧から、各校の調理実習や部活の際に、班ごとに献立を選び、調理してもらいます。

その際は、どの高校の献立でも良いこととしますが、1つの班は自分の学校の献立で作ることとします。

また、調理実習は、どの学年でも家庭科部や調理学科の人たちでも良いです。(10)

④見た目、味、栄養バランスを5段階で評価してレポートを作成し、その学校の中でどの献立が一番良かったか決めてもらいます。

学食がある学校には、学食の方にも献立を作ってもらい、最後に評価してもらいます。

⑤その結果を県の教育機関が回収し、一番献立が良かった学校を決めます。(11)

⑥これを県のホームページや新聞などを使って県民に発信します。(12)

一番献立が良かった学校を表彰したいと思います。

①から⑥を6ヵ月で行い、残りの6ヵ月を使い、この後に説明する大間町の健康カレンダーへ掲載するほか、県のホームページなどに1日3校分ずつ掲載したいと考えています。

## 2. 耐久遠足を発展 (学校行事を発展)

13

次に私たちは、運動習慣に着目しました。

運動習慣のある人の割合は、成人男性41.5%、成人女性27.1%です。

14

学校行事の活性化と  
運動習慣の確立を結び付けるためには？

大間高校で毎年行う学校行事「耐久遠足」

➡ 内容を改良して、  
「運動は楽しい」イメージをもって  
もらう。

このことを改善するために、学校行事に健康の要素を取り入れて、現在、大間高校で行われている耐久遠足を発展させることを提案します。(14・15)

15

耐久遠足とは・・・

大間高校からスタートし、町内の決められたコースを歩いて、達成感や友達との思い出を得ることができる大間高校の大事なイベントの1つです。

内容として、①各ホームルームで4チームを作り、各チェックポイントに向かいます。チェックポイントでスタンプを押したら、食材カードをゲットできます。スタンプは、大間町の行ってみたいところ、計8か所に設置

②展望台で、集めた食材カードと食材を交換します。

③全員揃ったホームルームごとにバーベキューの準備をし、引き換えた食材を使って調理して食べます。(16)

バーベキューの材料は、大間町の食材をメインに使います。これには、今まで耐久遠足の終わりに食べていた豚汁の費用を充てます。

16

～耐久遠足を発展～

- ①各HRで4チームをつくる。
- ②各チェックポイントでスタンプを押す。  
食材カードをゲットする。  
※スタンプを置く場所は大間の行ってみたいところ。  
例) スライドページ58～59  
本州最北端、神社、赤灯、フェリーターミナル
- ③展望台で食材カードと食材を交換する。
- ④引き換えた食材でBBQ♪

また、耐久遠足中には、各チェックポイントで班員全員が写るように写真を撮ってきてもらいます。

撮影スポットは、学年ごとに違う場所やお題にします。

17

他にも…

- ・各チェックポイントで班の全員が映る写真を撮る。
- ・学年ごとに違う場所、テーマでたくさんの写真を撮り、それをひとつの大きな写真にする。
- ・費用は？  
PTAの方が調理していた豚汁の費用を違う。
- ・BBQなら保護者と一緒に調理できる。
- ・BBQ食材は地元で取れた食材をメインに使用します。

それを1つの大きな写真にし、学校に展示したり、後に出てくる健康カレンダーに掲載します。(17)

18

### 3. 健康カレンダーの作成

以上の2つの提案を大間町民に発信するために健康カレンダーを作成することを提案します。

19

・カレンダーに高校生が考えたレシピを掲載する

20

・リラックス方法やストレス解消法、健康に関する豆知識、耐久遠足の様子やインタビューを掲載する。  
 ・青森県内の市町村のイベントや風景写真を掲載する。

俳句やイラストは、高校生の案の中から選抜して載せます。

季節ごとに3ページ、合計で12ページになるように作成します。  
(19・20)



以上3つの提案全体を通して、高校生を中心に大間はもちろん、青森県全体で健康について考えてもらうことに意義があります。

また、この活動をすることで、短命県解消とともに、大間だけではなく、青森県の活性化にもつながると思います。(21)

21

意義

「 高校生中心に青森県全体で健康について考える 」

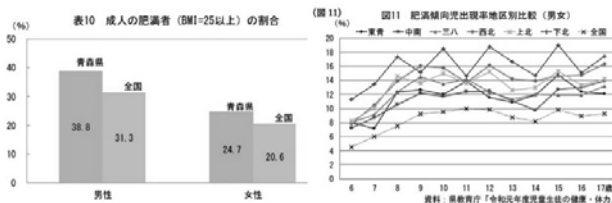
この活動で



県民全体で短命県から脱出するための一歩として、私たち高校生が貢献できたらと思います。

## 4. 給食を大間町に

### 県内の大人と 特に下北の子どもたちは肥満傾向



次に、少子高齢化による人口の減少が大間町でも問題になっている現状を受けて、地方の人口維持を目指すため、平均寿命を延ばす取組について提案します。

県内の大人、特に下北の子ども達は肥満傾向です。(23)

また、青森県の平均寿命は全国最下位です。

その原因として、生活習慣病、悪性新生物、心疾患が挙げられます。

(24)

1日の塩分摂取量の基準値は、男性7g、女性6gとされていますが、青森県では男性11g、女性8gと基準値を上回っていることが分かります。

青森県では、この塩分量が当たり前となつていますが、日本全体と比較してみたときに異常な値であることに気付きました。

結果…平均寿命全国最下位

生活習慣病が主な原因

食生活の改善が必要

そこで、私たちは、食生活の改善を目的とし、町に給食を導入することを提案します。

大間町には給食センターが無い。

一番近いのはむつ市。

でも、距離と時間の関係で制限されて利用できない。

そのため…

小学生の時から  
弁当持参

ここでは、食生活を改善するため、小、中、高校生の食事に注目しました。

私たちの住む大間町には給食センターがありません。そのため、大間町の小、中、高校生は毎日お弁当を持参しています。(25)

**26**

お弁当でもいいのでは…？

お弁当のメリット・デメリット

メリット	デメリット
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の好きな物を食べることができる。</li> <li>・好きな量を持っていくことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手作りのために時間がかかる。</li> <li>・家庭の味以外の物をあまり食べたことがない。</li> </ul>

**27**

給食のメリット・デメリット

メリット	デメリット
<ul style="list-style-type: none"> <li>・栄養バランスの安定ができる。</li> <li>・保護者への負担が減る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アレルギーのためその人に合わせたものを作らなければならない。</li> <li>・好き嫌いがある。</li> <li>・食わず嫌いがある。</li> </ul>



**28**

そこで提案!!!

町にある飲食店に給食を提供してもらおう

↓

健康カレンダーのレシピがあれば飲食店の負担軽減

大間町に飲食店は19店  
うちお昼に営業しているのは14店  
5店空いてる

**29**

飲食店が協力するメリットとして…

- ①安定した収入の確保  
 $1食300円 \times 5日 \times 4週 \times 120人(生徒数) = 72万円$
- ②料理人自身も塩分量に着目するようになる。
- ③お店の宣伝効果。

問題点

- ①飲食店の業務が増える。→地域の雇用が増える。
- ②好きな食べ物が無い。→食わず嫌いを直すきっかけに。
- ③量が少ない。→肥満防止、追加で家庭のお弁当、家族での会話。

お弁当は、自分の好きな物に頼りがちで、栄養バランスも良いのか悪いのか家庭によって異なります。

また、幼い頃から家庭の味以外の味にあまり触れないため、正しい食生活について授業以外で知ることがありません。(26)

そこで給食を導入することで、栄養バランスの安定を図り、若い世代から食への意識を高め、塩分量の軽減ができると考えました。(27)

しかし、大間町に給食センターを導入するには、約11億円と、多大な費用がかかります。

そこで、町の飲食店の協力による給食導入を提案します。

現在、大間町には飲食店が19店舗あります。そのうち、昼に営業しているのは14店舗のため、5店舗が空いています。

この5店舗に協力してもらいたいと考えています。(28)

レシピについては、先ほど提案した健康カレンダーを活用することで、店舗の負担を軽減することができます。

最近はコロナ禍で経営が困難な店舗も少なくありません。

給食を作ることで1食300円×5日×4週×120人=72万円の売上げとなり、これは経営の手助けになると考えました。

そして、料理の塩分量も基準値に合わせもらうため、健康的な食事を摂ることができます。(29)

給食導入で食生活の改善、習慣化、そして大間町の平均寿命を延ばすことができると考えています。



**30**

## 5. 体験部（インターンシップ部） 命名 「大間町を救い隊」

**31**

農林水産業の現状

- ・ 若年層の低下、高齢者の増加  
→ 県平均年齢63.8歳  
農林・漁業従事者の減少、後継者不足
- ・ 収入が不安定  
→ 不漁、天候の影響を受けやすい
- ・ 農林水産業産出額4,150億円  
うち漁業産出額は640億円  
マグロ漁71億円  
(クロマグロ46億円全国第1位)  
ホタテ養殖209億円(全国第1位)

**32**

提案  
大間高校生が地域の担い手になる

方法  
『大間町を救い隊』  
…大間高校生が、  
町役場や地元の企業と協力して活動する



**33**

きっかけ

- ・ 放課後の学校生活を豊かにしたい。
- ・ 専門高校ではなくても活動したい。

この活動を通して

- ・ 高校生のうちからいろいろなことを体験し、将来を見据えた経験を積む。  
例) ボランティア、料理、ガイド、農業、漁業…
- ・ 農林水産業従事者の労働力不足を解消できる。
- ・ 卒業後の雇用と即戦力につながる。

次に、農林水産業の現状について、考えました。

その中でも、私たちは農業・漁業従事者における若年層の低下に着目しました。(31)

この課題を解決するため、大間高校に体験部を創設し、高校生が役場や地元の企業と協力し活動を行う「大間町を救い隊」を結成することを提案します。(32)

活動の内容としては、  
1つ目は困っている農林水産業や飲食店のお手伝い、  
2つ目は、自分の将来の夢に合うような場所を選び活動をしていきます。

この活動をきっかけとし、放課後の学校生活を豊かにし、普通高校でも専門的な活動がしたいと思いました。

また、現状として挙げられた若年層の低下を防ぐために、大間高校の「めんちょ活動部」や地域おこし協力隊よりも幅広い活動をしたいと思いました。

高校生のうちからいろいろな職業やボランティアを行うことで、将来必要な知識や経験を積み、より明確に将来を見据えることができると考えます。(33)

## 活動例

飲食店で体験  
→調理師に興味がある人  
フェリーで体験  
→観光、接客業に興味がある人  
農林水産業で体験  
→農林水産業に興味がある人  
学校や児童館で体験  
→保育に興味がある人  
伝統産業や地元産業を体験  
→地元を盛り上げたい人

お店側のメリット  
・後継者を養成できる。  
・休日や放課後に  
高校生が従業員の  
子どもの相手をして  
くれる。



ゆくゆくは大間町のお手伝いから北通り地域の担い手へ

大畑漁港  
「キャベツウニの養殖」  
駒嶺（風間浦村）  
「あわび増殖センター」



この先、やってみたいと思っていることや興味があることなど、自分の将来のために積極的に活動していくかたちになります。（34）

では、次に具体的な案として、漁師さんや農家さんのお手伝いをするという活動を説明します。

大間町はマグロで有名ですが、その他にはあまりありません。

もっと大間町を活性化させ発展させるためには、他の特産品を生み出せばいいのではないかと考えました。

しかし、特産品を生み出す方法を私たちは知りません。

そこで、キャベツウニの養殖を行っている大畑漁協、風間浦村のあわび増殖センターといった企業と協力できればと考えました。（35）

キャベツウニとは、キャベツを餌に育てられたウニです。

キャベツウニの特徴としては、身が大きく甘くなり、磯臭さのような臭いが全くないそうです。

この情報を得た大畑漁協さんは、養殖に挑戦し成功させました。

また、北通りの風間浦村に「あわび増殖センター」という施設があります。

大間町の隣に位置しているため、ここでお手伝いできれば、その地域の海の地形を知ることや漁業関係者との人脈ができたり、海の中で起きていること、その解決策を様々な方向から考えたりできると思います。

また、地域の農家さんのお手伝いもします。

「オコッペいも」など、その地域にしかない育て方や方法があります。

それを引き継いでいくためにも「救い隊」として活動をする必要があると思います。

青森の活性化のためにそれぞれの地域の高校生同士で交流をし、各地域の情報を交換し合うような機会を作ることができれば、様々な考え方や様々な方法で試すことができ、活性化につながると思います。

ゆくゆくは、体験部という形でお手伝いをするという状態から、地域の担い手となり、地域へ貢献できたらと思っています。

36

高校生が行うには難しい。  
新規事業も資金がかかる。  
しかし…

高校生 役場 企業



また、先ほども述べたように、今の地域の特産品以上のものを作ること  
で、人口減少の解決や後継者不足の解決、大間町の発展、そして青森県の発展にもつながっていくと思います。

農業・漁業に使う道具の準備など、私たち高校生が行うには難しく、新規事業にも資金がかかりますが、役場や企業と協力して北通りの活性化を目指していくことで、労働不足の解消、卒業後を見据えた地域活動ができると考えています。(36)

そして、協力をしていく上で地域とのコミュニケーションが取れて即戦力になり、課題の若年層の低下を防ぐきっかけになると考えています。

以上のことを受けて、私たちは観光の観点から、地域の認知度を上げるための提案を2つ考えました。(37)

37

地域の認知度を  
あげるための2つの提案

①ふるさと納税の活用  
②SNS映えスポットの作成

まずは、コロナ禍をプラスにするための「ふるさと納税×高校生」の新しい観光スタイルです。

コロナ禍により遠出ができず観光スタイルが変わりつつある中、私たちはふるさと納税に焦点を当てました。

青森県の現在の返礼品である津軽のりんごや県産のお肉、大間マグロやお米などの特産物に加え、返礼品の新青森スタイルを2種類考えました。

38

新・青森スタイルのふるさと納税

それってどんなの？

1.体験型返礼品

1種類目は、青森県の郷土料理や芸術を自宅で体験する返礼品です。(38)

それらを体験できるキットを設け、作り方の手順を記した動画を配信することで、自宅で青森の味や文化に触れることができます。

大間町で例えると、べこもち作りやヒバ製品、ミニねぶたの作成等が挙げられます。(39)

39

1. 青森ならではの郷土料理や芸術作品を自宅で体験

体験キットを返礼品に  
↓  
動画を配信し、その手順によって作成  
自宅で青森の観光気分！

例えば大間なら…  
べこもち作成、ヒバ製品の作成、ミニねぶた作成等

地域の事業者に協力していただき、地元の人が日頃から地元のことを感じるためにも、これらが地域の伝統や文化を若い世代へと伝えていくことができると考えました。

また、「おうち時間を観光に」というキャッチフレーズを確立したいと思っています。

## 2. 体験型チケット

40

青森県で体験できるイベントをチケット化し返礼

↓  
チケットの持参でご当地体験

↓  
ついでに観光も

例えば大間町なら…  
漁師体験、津軽塗体験、おこっぺ芋掘り体験等

2種類目は、体験型チケットです。  
ご当地で体験することができる催し物やイベントをチケット化し、自らが納税した自治体にチケットを持参し、体験することができるという仕組みです。

大間町で例えると漁師体験や津軽塗体験、おこっぺ芋掘り体験等が挙げられます。(40)

ふるさと納税を通じた旅行により、地元の活性化を図ることができると考えます。

また、この2つの新青森スタイルの返礼品を使って、どのように地域の魅力をPRするかを御紹介します。

(41)

新・青森スタイルのふるさと納税

41

## 2. 返礼品を用いてPR

内容

- ・PR商品を付属品に  
(パンフレットや特産品)
  - ・PR動画(画像)を高校生が作成する。
- 返礼品の作成やPR内容を地域おこし協力隊や体験部と協力する。



42

まず、パンフレットや特産品のPR商品を返礼品に付属し、プラスアルファで青森県を紹介します。

次にPR動画や画像をふるさと納税公式サイトへ配信し、注目を集めます。

返礼品への付属品やPR内容、動画撮影等は、先ほど紹介した体験部や地域まちおこし協力隊の方々と協力することを考えています。(42)

ふるさと納税を活用して…

43

- ・コロナ禍をこえた新しい観光でストレス解消
- ・青森県への納税者の定着化
- ・青森県や市町村が寄付により経済の活性化と町おこしが発展し、よい循環がうまれる。
- ・高校生が商品開発や景品作成に直接的に関与する。

➡ 地域から青森県へ

以上のことを通して、ふるさと納税を活用し、コロナ禍を超えた新しい観光スタイルでストレスを解消しながらも、ふるさと納税の利用者を定着化し、税源を確保できると考えました。

そして、青森県や地方への寄付による経済の活性化や町おこしを発展させるため、私たち高校生が商品開発や動画作成に直接的に関与することができるという高校生活の活性化を見据えたメリットを考えました。(43)

観光のあり方が変わってきている世の中ですが、青森県がこの困難を乗り越えることができるように、私たち高校生も頑張りたいと思います。



## ② SNS 映えスポット作成

44

きっかけ 大間町の人口減少  
1960年 7,982人  
↓  
2020年 5,126人

対策 県外からの転入者を増やす  
テレワーク推進  
新たな特産品の開発 など

次に、大間町の認知度を上げるため、SNS 映えスポットの作成を提案します。

なぜ私たちが SNS 映えスポットを作成したいのかというと、大間町は、1960年から今までの間に人口が約3千人ほど減少しています。この現状を受け、移住者や観光客を増やしたいと思い、そのためには大間町の魅力を発信することが大切だと考えたからです。(44)

なぜ？

- ・新型コロナウイルスの影響
- ・通勤ラッシュなどの混雑 など



避けるために…

田舎暮らしに興味を持つ人が増えている

45

はじめに私たちは、転入者を増やしたいと考えました。

最近では、新型コロナウイルスの影響や通勤ラッシュといった混雑を避けるために、田舎暮らしに興味を持つ人が増えています。(45)

転入者を増やす対策としては、テレワーク推進などが挙げられますが、これは他の地域でも進められています。

そこで、私たちは大間町を選んでもらうために観光地であることに加えて、日常生活も送れることをアピールする必要があると考えました。



例えば、町内のスーパーや飲食店、自宅から学校まで徒歩で移動することができ、町内を徒歩で移動すると仕事で疲れたときには、豊かな自然を見ることができます。

また、温泉があることや函館までフェリーで90分という魅力があります。(46)

選んでもらうために何をアピールするか？  
「大間町でも生活できる！」

- ・町内は徒歩で移動可能
- ・豊かな自然
- ・温泉
- ・函館までフェリーで90分
- ・雪が少ない など



46

これらの魅力を知ってもらうために2つの方法を考えました。

1つ目は、先ほど提案した耐久遠足の発展として、大間町の生活スポットを巡るスタンプラリーです。

遠足のルートや、観光客・移住を考えている人のツアーにもできます。(47)

そこで大間の魅力を知ってもらうために…

47

大間町の生活スポットを巡るスタンプラリーを企画  
→耐久遠足のコースにすることもできる。

SNS映えする場所をアピール。  
→地元の高校生だからこそ知っている。

➡ **大間に移住・定住するきっかけ**

実際に地域の方々に巡ってもらい、その姿を大間町のホームページや動画サイトに掲載し、誰でも楽しめることをアピールしたいと考えています。その際に SNS 映えスポットも巡ってもらう予定です。



2つ目は、SNS映えスポットをアピールすることです。

地元の高校生だからこそ知っている秘密のスポットや絶景を眺めることができる場所などを考えました。(47)

大間には、観光としての大間町をPRしている「まちおこし協力隊」という方々がいます。その方々と協力してPRしたいと考えています。



このように大間町の魅力を新しく作り、大間町を選んでもらえるように高校生でもアピールできます。

大間町の様々な場所を巡りながら、大間のことを知ってもらい、大間に移住・定住するきっかけになればと思います。



以上のことを受けて、観光の観点からイメージとして、大間町のSNS映えスポットを考えてみました。

題して「大間のマグロード」です。(48)

漁師の町、大間としての景観や文化を守りながらも、SNS映えともなるスポットを考えたとき、私たちは、大漁旗に注目しました。



大間の漁船で実際に使われている大漁旗や手作りの大漁旗を道端に飾り、彩りとインパクトを加えることによって、何もなかった道路がドライブコースに変わり、SNS映えするのではないかと考えました。

現代には珍しい、このSNS映えスポットは、若者や海外の観光客が興味を持つのではないかと考えました。



そして、この取組のメリットとして、「マグロード」で観光客を増やしながらも、漁師の町、大間としてアピールし、高校生が授業やイベントの一環として、このSNS映えスポット作成に参加することで、地元の人や高校生活の活性化につながるのではないかと考えました。

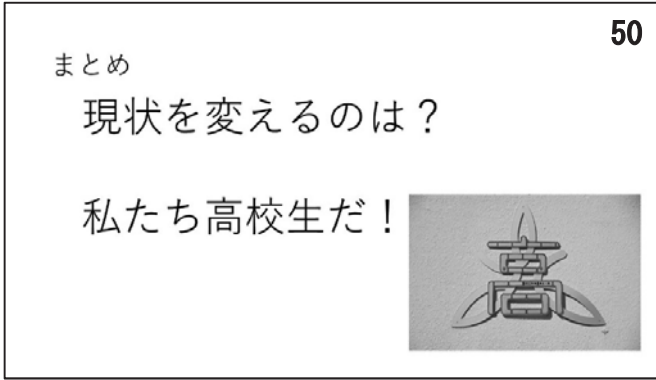


他にも大間崎やキャトルパークなどの観光地、夜景や日の出、夕陽などの景観が大間町のSNS映えスポットとして活用できるのではないかと考えました。(49)



以上を通して、私たちは青森県や地域の持つ健康、観光、農林水産業、人口の課題を共通の課題として捉え、地域の改善が青森県を活性化するための一番の近道だと考えました。

このような現状を私たち高校生が変えていけるのではないかと思います。



今回は、このような機会をいただき、誠にありがとうございました。

私たちの高校生活を活発にするためにも、この課題を日頃から身近に感じたいと思います。

現状を変えるのは私たち高校生だ！  
 以上で大間高等学校の発表を終わります。(50)



【質 疑（質問者：県議会議員、答弁者：青森県立大間高等学校）】

● <sup>さいとう</sup> 齊藤 <sup>ちかし</sup> 爾 議員（自由民主党）

（齊藤議員）



本県の現状、そして大間町の現状を踏まえた御提言をいただきました。高校生らしい御提言、そしてまた非常に有意義な御提言もありました。ありがとうございます。

そして、最後、現状を変えるのは私たち高校生だと、非常に力強い御発言もありまして、これからの青森県は良い方向に向かうんだらうなどというふうな気がしております。

高校生による献立作成、体験部など、様々御提言いただきましたが、このいろいろいただいた中で、皆さんが特にこれはしっかりとやりたいと、逆に言うと、一番問題意識を感じているものは何なのか、そして、その理由をお伺いいたします。

（答弁）



今回、特にやりたいものは、青森県内の高校から1つずつ献立を提案してもらおうことです。

理由として、高校生が主体的に行えるからです。

これを行うことで、高校生の健康に対する意識が上がると同時に、地元の特産品を用いることで地域のPRにもなり、青森県全体が活性化するのではないかと考えます。

● <sup>いちのへ</sup> 一戸 <sup>ふみお</sup> 富美雄 議員（青和会）

（一戸議員）



大変丁寧な青森県の活性化について御提案をいただきましたし、大間高校、今年で46年になる歴史のある学校のようにありますし、活動そのものも少し見させてもらいましたら、「めんちょこ活動部」非公式です、という、こういう活動もされていて、多くの経験もされていること、見させていただきました。

青森県を活性化させるということで、献立、運動、観光面、こういったキーワードでいろいろお話をされました。

こういった中で、将来の青森県をどうやって支えていくのか。まずは健康ということで提案をされておりました。献立を全県からいろいろ集めて、5段階評価をし、カレンダーに載せていくと。大変良いことだと思いますし、給食センターがないので、そこでも活用したいという話も触れられておりました。

こういった多くの取組ですけれども、献立について、健康カレンダー以外に何か考えている活用方法がありましたら、お話をいただきたいと思います。



(答弁)



新聞やホームページに掲載することで、毎日違った健康的な献立を見る人が利用できるようにするほか、テレビなど、注目が集まっているものを使い、たくさんの人に献立を発信してもらいたいと考えています。

また、これを知った人たちには、給食やお店、病院、家庭などで活用してもらいたいと思っています。

● きくち けんたろう 菊池 憲太郎 議員(自由民主党)

(菊池議員)



SNS映えスポット作戦ということで御提案がありまして、主に移住促進につながるような取組ということで拝見をしておりましたけども、まさに大間町といえばマグロということで、非常に全国的にも有名で、世界的なブランドとも言われているようなものでありますけども、そういったことを活用しながら、大間自体もこれまで地域おこし等の取組を進めてきたというふうに思っております。

そんな中で、この移住促進についても、非常にこういったものが役立つのではないかとこのように思っていますが、移住に興味がある、そういった方々に大間の中で一番にPRをしたい、それはどんなことかということをお尋ねさせていただきたいと思っております。

(答弁)



私たちは、日常生活をPRしたいと考えています。

徒歩で移動することができることやお店、仕事、そして学校もあること、家族で生活することもできます。実際に私たち高校生が生活し、生きることができています。

そういった日常的な部分をPRしていきたいと考えています。

## 【質 疑（質問者：青森県立大間高等学校、答弁者：県）】

（質問）



私たちが提案した「大間町を救い隊」のような高校生による地域活性化に向けた活動について、これまで県では、どのような支援を行ってきたのか、また、これからどのような支援を行うのか教えてください。

また、提案したように、私たちは大間町の魅力を広め、大間町へ移住する人を増やしたいと思っています。

県では、県内への移住を促進するため、地方自治体へどのような支援、取組を行っているのか教えてください。

### ●教育庁 学校教育課

（学校教育課長）



県教育委員会では、「郷土に誇りを持ち、多様性を尊重し、創造力豊かで、新しい時代を主体的に切り拓く人づくり」を教育施策の方針に掲げ、地域課題の研究や地域活性化等に取り組む県立学校を支援しています。

具体的には、平成20年度から実施している「ドリカム人づくり推進事業」では、生徒の夢の実現や地域貢献活動などの取組を支援しており、今年度は、特別支援学校を含めた21校が地域食材の魅力を広める料理のレシピコンテストや商品開発、観光客等に対する高校生おもてなしプロジェクトなど、様々な活動を展開しています。

また、令和2年度から実施している「高校から取り組む人口減少対策プロジェクト事業」では、本県の課題である人口減少克服のための研究や地域活性化等の取組を支援しており、高校8校が地域の魅力の発信や町おこしにつながる新たな観光プランの研究、移住促進などに取り組んでいます。

先ほど、大間高校からアイデア溢れる提案をいただき、大変参考になるものと考えております。

県教育委員会では、今後とも、高校生による地域課題解決や地域貢献の取組を支援して参ります。

### ●企画政策部 地域活力振興課

（地域活力振興課長）



県では、人口減少対策の重要な柱の1つとして、移住者を増やすための様々な取組を行っています。

具体的には、首都圏における本県の移住相談窓口「青森暮らしサポートセンター」を開設し、移住希望者の相談に応じているほか、県の移住総合サイト「あおもり暮らし」や移住に役立つ情報を盛り込んだガイドブックを作成し、広く情報発信して本県の認知度向上に取り組んでいます。

大間高校の皆さんは、「大間町でも生活できる」を掲げて、その魅力を知ってもらうため、生活スポットを巡るスタンプラリー企画や町のSNS映えスポットのPRを提案されていますが、移住先として選ばれるためには、移住後にどのような暮らし方ができるのかを示すことが重要なポイントであり、

皆さんの提案はまさにそのポイントを捉えるものと考えております。

県では、市町村、民間団体等も参加する移住相談イベントを開催し、移住する上で必要な仕事、住まい、暮らしの情報を一体的に提供することで、本県への移住に対する興味・関心を高め、移住する上での不安の解消につながるよう取り組んでいます。

なお、今年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大により、会場に集まる形のイベントを首都圏で開催することが難しいため、ウェブ会議システム、ZOOMを使ったオンラインでの移住相談イベントを実施しています。

また、これまで本県に移住した方々にインタビューを行い、移住後のライフスタイルを記事にしてウェブサイトで発信してきたところですが、移住後の暮らしがよりリアルに伝わるよう、動画コンテンツを増やして発信することとし、現在、その制作に取り組んでいるところです。

県としては、今後も移住希望者への分かりやすい情報発信に努め、本県の移住促進に取り組んで参ります。